

「方言」と「共通語」の比較対照表（試案）

— 大学における授業実践を踏まえての分析的考察 —

日 高 貢一郎

【要 旨】 「方言」と「共通語」には様々な特徴と違いがあり、どちらも我われの毎日の言語生活の中で、非常に重要な役割を果たしている。

日高はこれまで大分大学で長年にわたって方言学の授業を担当しているが、その実践を踏まえ、「方言」と「共通語」を比較して考察し、両者の特性や機能、役割などを38項目にわたって対照した表を提示する。

この対照表は、大学・短大ではもとより、小・中・高校の国語の時間に「方言」を取り上げる場合にも、その指導に当たる教師がぜひとも押さえておくべき大事なポイントをまとめた資料として役立つであろう。

【キーワード】 「方言」と「共通語」 特性の分析 比較対照表

はじめに

この稿では、主に大学や短期大学などの授業で「方言」について取り上げる場合を念頭におきながら、「方言」とは？「共通語」とは？という、「方言学」においては最も基本的なことから改めて検討の対象にし、両者を対比しつつ、それぞれのもつ特性や性格、機能、役割、特徴などについて、可能な限り多方面から分析し考察を加えることを目的とする。1)

そして、その「方言」と「共通語」に関する重要な事項や大切なポイントを網羅して、両者を見やすくわかりやすく対比した「対照表」を提示したい、というのがねらいである。

現在、全国各地の大学や短大で、「国語学」（あるいは「日本語学」）の授業のひとつとして、「方言学」が講じられているところは、おそらく相当な数にのぼっているものと思われる。

大分大学では、旧・学芸学部時代から、カリキュラムの中に「方言学」の授業が位置づけられ、以後、⇒教育学部⇒教育福祉科学部と学部の名前は変わったものの、一貫して「方言学」は「国語学」分野の特徴的な講義のひとつとして講じられてきている。担当者は、松田正義教授から始まって、糸井寛一教授を経て、現在の私・日高へと受け継がれてきた。2)

私は、国語科の教職免許取得をめざす2年生を対象とした「方言学研究」という半年間の授業の冒頭で、「方言」と「共通語」について、学生といっしょに考えることから毎年講義をスタートさせている。この稿では、その実践や経験を踏まえながら考えていく。3)

平成 18 年 10 月 31 日受理

* ひだか・こういちろう 大分大学教育福祉科学部国語学教室

また、近年は、小学校・中学校・高校でも、「国語科」の時間だけでなく「総合的な学習の時間」などでも、テーマとして地域のことば＝「方言」が取り上げられる機会も増えているようで、ときおり外部からの問い合わせが研究室に舞い込むことがある。

以下、この作業は、そういった「方言」をテーマにして授業を展開する際に、まず最初に必ず踏まえておくべき事柄、すなわち「方言」とはどういうものか、またそれに対する「共通語」とはどういうものか、を児童・生徒や学生たちに改めて認識し考えてもらう場合に、教師の側がしっかり押さえておくべき大事なポイントを確認することにも役立つだろう。

1. 国語学辞典類・専門書での扱い

(1) 『国語学辞典』などでの扱い

そう言う、そういったことは、『国語学辞典』などの当該項目に、当然記載してあるはずだろう、という声が聞こえてきそうだが、実は、案に相違して、そうでもないのである。

ちなみに、代表的なものとして、次のようなものに当たってみよう。

- 1) 国語学会編『国語学大辞典』（東京堂出版、昭和55年）
- 2) 佐藤喜代治編『国語学研究事典』（明治書院、昭和52年）
- 3) 金田一春彦ほか編『日本語百科大事典』（大修館書店、昭和63年）
- 4) 小池清治ほか編『日本語学キーワード事典』（朝倉書店、平成9年）

例えば、1)の『国語学大辞典』の場合には、次のような記述になっている。

方言【定義】方言には二義がある。一つには、個々の事象について、方言という。たとえば、「かたつむり」の方言、など。民間の日常では、方言という語をこの意で使うことが多い。（中略）さて、二つには、地方地方の地域的言語体系について、これを方言と考える。学問的立場では、この考えによることが多い。……（以下、略）

こういった記述の仕方は、他の本においてもほぼ同様である。

そもそもこれらの本は、国語学・日本語学に関する基本的な術語を取り上げて、その意味や使われ方について解説することが主眼になっているのだから、言い換えると“国語学関係用語解説辞典”なのだから、考えてみれば、ある意味では当然のことだというべきか……。

(2) 方言学専門書での扱い

ならば、方言学に関する専門書なら詳しく取り上げて言及しているはずだ…と考えたくなる。代表的な講座ものや、概説書として書かれた次のような専門書に、改めて目を通してみよう。

- 5) 東條操編『日本方言学』（吉川弘文館、昭和29年）
- 6) 遠藤嘉基ほか編『方言学講座』第1巻「概説」（東京堂出版、昭和36年）
- 7) 藤原与一『方言学』（三省堂、昭和37年）
- 8) 国語学会編『方言学概説』（武蔵野書院、昭和50年）
- 9) 大石初太郎ほか編『方言と標準語』～日本語方言学概説～（筑摩書房、昭和50年）
- 10) 柴田武編『岩波講座 日本語』第11巻「方言」（岩波書店、昭和52年）
- 11) 神鳥武彦編『日本語方言学』（東京堂出版、昭和54年）
- 12) 徳川宗賢『日本語の世界 言葉・西と東』（中央公論社、昭和56年）
- 13) 飯豊穀一ほか編『講座方言学』第1巻「方言概説」（国書刊行会、昭和61年）

ところが、これらを見てみると、意外にも、方言学のいちばん基本的かつ基礎的な概念であり必須のキーワードであるはずの「方言」と「共通語」について、その特性や性格、機能、役割などに関する詳しい分析・解説や記述がそれほど詳細には載せられていない、という思わぬ結果が明らかになった。何とも「灯台もと暗し」の感を覚える。4)

これら専門の辞典類や関係の文献では、いわば自明のこと、当然のこととして、それらの記述を省略した、あるいはきわめて簡略にしたとでも考えるしかないが、それにしても、改めてこのことに気がつく、やはり何だか物足りないような、意外な感を覚えるのは否めない。

おそらくこの本の場合にもスペースの制約があり、必要事項を厳選し、極力簡潔に記述する必要に迫られた結果、以上のようなことになったのだと推察するが…。5)

全体的な印象としては、「方言」と「共通語」という現実の言語実態そのものについての分析・言及よりも、「方言」と「共通語」という術語（学術用語・テクニカルターム）の意味するもの、概念規定のほうに比重が置かれているという印象を強く受ける内容となっている。

もちろんそれも必要であり大事なことだが、もっとその実態や機能、特性についての言及があってもいいのではないか…。6)

以上のような実情を知ったことが、この稿で、「方言」と「共通語」を対比しつつ、私が考える限り多様な観点から分析と考察を試みたいと考えた大きな動機になっている。

2. 「方言」とは 「共通語」とは

では、以下、改めて「方言」とは？「共通語」とは？について考えてみたい。

ここからは、専門用語としての「方言」「共通語」という術語の使われ方・使い方や意味あいについてではなく、「方言」と「共通語」の内実、つまり、具体的な実態や役割・機能などの分析に重点をおいて考察していくことにする。

なお、授業において仮に「方言」を主たるテーマとして取り上げるにしても、それと対比される「共通語」も必然的に考慮の対象に入ってくるし、また両方とも我われの毎日の暮らしの中でかけがえのない重要な働きをしているのだから、両者を比較対照しながら考えるほうがより有効であり、その相違をいっそう鮮明に浮かび上がらせることになるだろう。

そこで、この両者にできるだけ多様な観点からスポットライトを当ててその違いを描き出し、その特性や性格、毎日の言語生活の中で果たしている機能、役割などについて考えてみたい。

それを全体的・総括的に把握しやすいよう、まず次のページに対照表にして示そう。

なお、両者の違いを際立たせて把握しやすくするために、できるだけ簡潔に、ややコントラストを付けて表現することにする。そのあと、必要に応じて個々に注記やコメントを加える。

その際、「方言」について考える場合には、その土地で生まれ育ったいわゆる生え抜きの人たちを想定している。家族の転勤などによって言語形成期の途中から他の地域に転出・転入した場合や、成人後に移動した場合などには、だいたい事情が異なってくると思われる。

また、比較するに当たっては、極力公平な立場から両者を眺めたいと考えているが、私自身が方言社会で育ち、また方言社会での生活が長い関係で（0歳から19歳まで宮崎県で過ごし、大学時代からの13年間を東京で過ごしたあと、現在住んでいる大分市に移り、大分在住27年になる）、思わず知らず方言寄りの見方になっているかもしれないことをお断わりしておく。

<表1> 「方言」と「共通語」の比較対照表

類	項目	No. 観 点	方 言	共 通 語	
第Ⅰ類	数	1 その数	多 数	1 つ	①
	種別	2 チャンネル	話しことばのみ	話しことば + 書きことば	②
	歴史	3 その歴史	古くから、自然に醸成	明治以降、人為的に形成	③
	範囲	4 通用範囲	狭 い (地域限定)	非常に広い (全国に 世界に)	④
	使用	5 主な使用地域	地方(農山漁村)～都市部	都市部～地方(農山漁村)	⑤
		6 主な使用者	高齢者～中年～青少年～幼児	青少年～中年～高齢者	⑥
		7 主な対象者	地元の親しい人に対して	見知らぬ人などに対して	
		8 主な使用場面	日常の 私的な場面で	改まった 公的な場面で	
		9 主な話題	身の 身近な事柄を	広範で 多様な事柄を	
	習得	10 習得の順序	もの心ついてまず最初に習得	方言よりも後から習得	⑦
		11 習得の場	毎日の暮らしの中で	学校教育やマスコミなどで	⑧
		12 習得の方法	自然に 無意識のうちに	努力して 学習によって	⑨
		13 習得の環境	場面とセットで 一体的に	語や表現として 個別的に	⑩
		14 習得の手本 (話し言葉／書き言葉)	親や先輩など周りの身近な人	テレビ・ラジオ、アナウンサー ／教科書・新聞・国語辞典など	⑪
		15 習得の期間	ほぼ青年期ぐらいまでに	社会人になってからも継続	⑫
	役割	16 その役割	必要不可欠な自己表現手段	現代社会での基本的素養	
		17 使用目的	私用 (プライベート)	公用 (パブリック・フォーマル)	⑬
		18 主な用途	日常会話での意思疎通	改まった場での意思疎通	
	性質	19 話の性質	本音を率直・端的に表現	ときに建て前になりやすい	
		20 話しぶり	主情的・情熱的・熱っぽく	客観的・理性的・クールに	⑭
		21 その個性	ローカル色・多彩・多様	中立的・都会的・没个性的	
	位相	22 世 代 差	どの方言も世代差は大きい	世代差はさほど大きくない	⑮
		23 男 女 差	その方言によってまちまち	男女差は若年層では減少傾向	⑯
	表現	24 表現の程度	思いを存分に表現できる	思いをおおむね表現できる	⑰
		25 表現の満足度	表現しつくした実感・満足感	おおむね表現できた安堵感	⑱
	理解	26 理解の程度 (同一方言／他方言)	同一方言は細部まで理解可能 ／他方言だと十分な理解は困難	思いをおおむね理解できる	⑲
		27 理解の満足度 (同一方言／他方言)	同一方言なら連帯感と一体感 ／他方言だと距離感と疎外感	おおむね理解できた安心感	⑳
第Ⅱ類	評価	28 一般の視線	ときに物珍しく見られがち	ごく普通で特に珍しさをなし	㉑
		29 一般の見方 (－)	古めかしく 田舎くさい 鈍重	素っ気なく 冷たい 味がない	㉒
		30 一般の見方 (＋)	素朴で 温かく 味がある	あか抜けて スマート 軽快	㉓
		31 近年の評価	貴重な地域文化の象徴的存在	従来と特に変化なし	㉔
	活用	32 商品化や命名	方言グッズや命名で地域色を	万人向けに幅広く利用	㉕
		33 ドラマや映画	方言指導でその土地らしさを	非地域色 都会的・現代的	㉖
第Ⅲ類	比喩	34 喩えると	中核・基層 (地金・生地)	表 層 (メッキ・塗装)	㉗
		35 服装だと	着慣れた普段着 (肌着)	よそ行きの服 (貸衣装)	㉘
		36 植物だと	野生の在来種、自生の野草	移植した栽培種、園芸作物	㉙
		37 母なることば	年老いた実母	若く美しい継母	㉚
		38 色のイメージ	茶色、橙色、緑、虹色 …	白、青、灰色、無色透明 …	㉛

3. 考察とコメント

この対照表は、大きく「類 > 項目 > 観点」に分け、それぞれの観点ごとに、「方言」と「共通語」について対比したものである。

そのうち、「類」には、大きく次のような違いがある。

第Ⅰ類 「方言」と「共通語」のもつ特性についての分析と考察

第Ⅱ類 「方言」と「共通語」を 外側からの目で捉えたと

第Ⅲ類 「方言」と「共通語」を 他のものに喩えたとしたら

また、この「比較対照表」に対して予想される疑問・質問や、補足説明しておきたいことについてコメントを加える。なお、以下の①②…はく表1 >の右端の欄の①②に対応している。

第Ⅰ類 「方言」と「共通語」のもつ特性についての分析と考察

① 日本各地には実に多数の「方言」が存在し、方言相互の間では意思の疎通に支障がある。そのために橋渡しになることばが必要不可欠であり、その役割を果たしているのが「共通語」（全国共通語）である。共通語の中には、個別に見ると発音・表記・意味や用法などにゆれのあることばも多々あるが、大局的に見ると、共通語は1つであると考えられる。

② 方言について、「方言で書いた民話の本があるではないか」という指摘が予測されるが、それについては、こう答えたい。各地の民話はもともと方言で語られたものであり、その本は、方言による語り口や話されたときの雰囲気などをできるだけ忠実に再現しようとしてそうしたのであって、それはいわゆる「書きことば」ではなく、いわば“語りの文字化”ともいべきものである、と。

また、方言は話しことばであることから、意味が通じお互いが理解できるなら、かなり自由に変形・変化することができるのに対して、共通語のほうは話しことばと書きことばという2つの側面をもっているので、書きことばがひとつの規範となり、また抑止力にもなって、共通語の話しことばは、方言のように自由に変化することは難しい、という一面をもつ。

私は、学生たちにそのことを印象的に伝えるべく、「方言は耳と口のことば＝“耳口語”であり、共通語は耳と口のことばでもあり、目と手のことばでもある＝“耳口目手語”である」と、その違いを強調して表現している。口(話すこと)よりも耳(聞くこと)が先行するし、手(書くこと)よりも目(読むこと)が先行する。

③ 方言は遠い昔から、その土地に住んでいた人たちが何十代、何百年（千年以上？）にもわたって話し継ぎ、受け継いで代々伝えてきたものであり、その積み重ねと継承の上に、今日の方言の姿がある。「ローマは1日にしてならず」。

一方、共通語は主として明治以降、旧来の藩や旧国内だけでの交流ではすまなくなり、全国的なコミュニケーションが必要になり、首都・東京のことばをベースにして、ある程度人為的に作られてきた。が、歴史も浅く、まだまだ十全なものではなく、今後もさらに改良や補充を重ね、より望ましい日本語（標準語）をめざしていくことが求められている。

④ 方言の通じる範囲は狭いが、共通語は日本全国どこにおいても通じることばである。また、共通語は国内のみならず、日本語を代表するものとして、世界各地で学ばれる際の対象になっている。

- ⑤ 実際には、方言も共通語も全国でともに幅広く話され使われているのが実態である。

しいて挙げれば、方言は地方においてより多用され、共通語は都市部においてより多用されている、といえようか。

- ⑥ 使用者については、一般に、高齢者に方言がより多く使用され、若年層ほど共通語がよく使われると考えられているが、高年層でも改まった場面では共通語を話すのが一般的だし、青少年層でも、仲間どうしでのくつろいだ場面では、その世代なりの方言が話されている。

言い換えると、どの世代においても、方言も共通語も TPO（ときと場所と場合）に応じてともに使用されているのが実態だといえよう。

- ⑦⑧⑨⑩ この習得の順序と習得する状況、過程の違いは、あとあとに大きな影響を及ぼし、「方言」と「共通語」との間で大きな差を生じる。

まず方言は、もの心がつくと、日々の暮らしの中で、その語や表現が使われる典型的な場面に自分も身を置いて、いわば“場面とセットで、まるごと、全身で”体験を積み重ねてその意味あいや使い方を体得し身につけていく。それに対して、共通語は、そのあとから、主に学校教育や、テレビ・ラジオ、新聞・雑誌などのマスメディアその他を通して、その語や表現の意味・用法を“頭で”理解し、個々別々に知識として覚えていく、と言えよう。

つまり、方言は自分もその場面の登場人物の 1 人として実際に現場に立ち会うのに対し、共通語はいわば傍観者的な立場からそのシーンを眺めているような違いが感じられる。

やはりそうやって先に自然に覚えた方言のほうが、記憶のより深いところに浸透して定着し、より確かで、説得力があり、優位な地位を占めるのは、自然なことだと言えよう。7)

このように、「方言」と「共通語」が身につく順序と習得方法、習得の環境の違いは、のちのち、両者が我われの中で占める重みと浸透度、愛着の度合いに大きな差が生じることにつながっていく。

- ⑪ 「方言」と「共通語」を習得する過程で影響を受け、お手本になるのは、方言の場合には親や近所の人など身の周りにいる人たちが、共通語の場合に多くの人が挙げるのは、話しことばの面ではアナウンサーを代表とする、ラジオ・テレビなど放送に登場する人々だろう。

我われが学校で共通語を学ぶ際に傍にいて指導してくれたのは小・中・高校の先生だったが、その先生たちを、話し方・話しことばのお手本として挙げる人はどのくらいいるだろうか。外国では舞台俳優や演劇人のステータスが高く、お手本になっていると聞くが、日本においては、タレントは新語・流行語やおかしなことばを作り出したりしてむしろ日本語を乱すと顰蹙を買うことも少なくない。

一方、書きことばの面でお手本になるのは、規範性が強いという点では何ととっても国語辞典を代表とする辞典類だが、いかんせん、そこで示されているのは個々の単語の使い方や意味・用法、表記の仕方などであって、文や文章のような大きな単位での書きことばの規範や手本になるのは学校の教科書や新聞、雑誌などであろうか。

- ⑫ 「方言」と「共通語」がどのようにして習得され定着していくのか、その過程について、大きな流れを図式化して示すと、およそ次のようなことになるだろうか。

	幼児期	保育園・幼稚園	小・中・高校	短大・大学	社会人	壮年期	高年期
方言	初歩方言期	方言習得開始期	方言習得期	方言安定期	方言拡充期	……………→	
共通語		共通語受容開始期	共通語習得期	共通語活用期	共通語拡充期	=====→	

まず、方言についていうと、幼児の場合には、ようやくことばを覚えはじめた頃は、その土地のごく初歩的な方言だけで過ごしている状態が考えられる。

近年は乳幼児の頃からラジオ・テレビなどにふんだんに接しているし、昔に比べると早くから保育園や幼稚園に通うことが一般化しているから、より早い段階から共通語に触れ、親しむ状況が生まれている。しかし、まだその段階では、共通語は「聞いてわかる、受身の共通語」の初期の段階であって、まだまだ「話せる共通語、使える共通語」にはなっていない。いわば「方言も習得開始期、共通語も受容開始期」である。

共通語の学習が本格化するのはいよいよ学齢期に達してからで、小学校⇒中学校⇒高校と学年が進むに従って、理解し使える語彙も表現も多くなり、経験を重ねるに従って共通語を使う場面も能力も増え、次第に共通語の習得が進んでいく。一方、方言も、この時期には、家族や友人などとの間で思いを伝えあう不可欠の手段として、習得に拍車がかかる時期を迎える。この段階は、「方言習得期～方言活用期：共通語学習期～共通語習得期」といえよう。

そして学校を終えて社会人になると、ますます共通語の必要性を痛感し、また実際に使う機会も大幅に増えて、本格的な「共通語活用期」となる。ただし、語彙や表現などもまだまだ十分とはいえず（特に敬語は実際に頻繁に使うことを求められ、この頃から本格的な習得が始まる代表的なものだろう）、その後もずっと「共通語拡充期」が続くことになる。

一方、方言は青年期頃までにはほぼ習得して「方言安定期」とでもいうべき状況になっているだろう。が、それで十分というわけではなく、未知の方言（特に語彙が多いか？）との出会いもあるはずで、壮年～高年層との接触を通じて、さらに「方言拡充期」が続いていく。

- ⑬ 方言は日常茶飯の私的な場面・用途で最も力を発揮し、共通語は改まった公的な場面で最もその持ち味を発揮する。これが、「方言」と「共通語」の役割の中でいちばん大きな違いといつてよかろう。我われは、そのことを十分踏まえて、両者を巧みに使い分けている。

例えば、ふだんは方言まるだしで話す親しいお母さんたちが、学校のPTAの参観日に、教室での話し合いになると、共通語で意見を交わすのは、それが公的な場だからである。

同様に、町の老人クラブの役員会などにおいても、その状況は基本的には同じであろう。老人クラブのメンバーは若いお母さんたちに比べると日常の生活でも方言の度合いが強く、会議などにおいてもその顔ぶれや話の種類によってはかなりくだけたやり取りが行われるかもしれないが、改まった場ではやはり共通語でという意識は強く、程度の差こそあれ、基本的には共通語での会話が展開されるであろう。

そういう意味では、共通語は地方においても、毎日の暮らしの中でしばしば活用され、活躍している。「方言は地方で、共通語は都市部で」という単純な図式では決していない。

- ⑭ 方言は自分の思いを、飾らず、率直・端的に表現するところに持ち味がある。ときとしてそれはストレートな表現になり、場合によっては不躰だと受け取られることもある。

一方、共通語は冷静に、淡々と思いや考えを表現するという印象があるが、ときとして建て前が強く顔をのぞかせ、冷たくよそよそしい感じを与えることがある。

言うまでもないが、方言で建て前を滔滔と、共通語で本音を切々と述べる場合もあること、もちろんである。

- ⑮ 方言においては、今日では、マスメディアや学校教育が普及し浸透したことなどもあって、どの地域の方言も共通語の影響を受け、若い世代では老年層とはかなりの違いが見られると言われる。もちろん若年層のことばがすべて共通語に変わるわけではないが、全体として見

ると、共通語に引かれ、共通語寄りの変化を起こしているのは全国的な傾向と言えよう。

- ⑯ 日本語においては、ことばに男女差があるのがひとつの特徴だと言われる。方言の場合には、それぞれの方言によってその差が明瞭なもの、そうでないものなど、方言個々によって違いが見られる。共通語においても、女性の社会進出の影響などもあって、以前に比べると、次第に男女差が縮まる傾向にあると言われている。

- ⑰⑱ 方言はいわば“自家薬籠中のもの”であり、話し手はその意味や用法を熟知しているから、ここぞという場面になると、特に意識しなくても、最も適切な語や表現がひとりでにス〜ッと湧きだしてくる感がある。

その場合、単に意味だけでなく、その語や表現のもつ独特のニュアンスや細かい情感までもがいっしょに合わさって表現されるから、話し手としては、自分の言いたかったことを過不足なく、存分に表現しえた手応えと満足感が得られる。特に感覚表現、感情表現の分野においては、そのことが強く実感されるだろう。

一方、共通語は、学習によってあとから知識として習得したものだけに、方言のように自在に…とはいかず、あれこれ苦心しながらことばを探し選んで表現することになる。もちろん共通語の習熟度によって個人差もあるが、共通語で自分の思いを表現できるその深さは、方言に比べるとどうしても浅くなると意識している人が多そうである。

従って、あとに残るのは、何とか自分の言いたかったことを言い表せた(ような気がする)という安堵感であろうか。

- ⑲⑳ では、方言の場合、それを受け取った聞き手の側からするとどうなるか。大きく2つの立場に分けて考えなければならない。

同じ方言を共有している話し手 ⇄ 聞き手の間では、話し手の発言をその細かいニュアンスや情感までもを含めて、十分にしっかりと受け止めることができるから、相手との間に共感や一体感が生まれ、非常に深い理解が可能になる。(もちろん相手の意見に対して対立する考えや、敵対心などがある場合はそうはいかないが、しかしその場合でも、相手の思いが細部までより深くわかるという点では、基本的な関係は同様である)

一方、自分が知らない遠く離れた他の地方の方言の場合には、およそ理解したといえる状態からはほど遠く、距離感と疎外感を味わい、場合によっては皆目理解できずに呆然と立ち尽くすことになる。8) №26～27で、() して/で切って2つに分けて示したのは、そういう場合の両者の違いを示したものである。

それに対して、共通語の場合には、相手の思いをおおむね理解することができるし、またコミュニケーションの後には、ほぼ理解できたという安心感が残ることになる。

第Ⅱ類 「方言」と「共通語」を外側からの目で捉えると

次に、「方言」と「共通語」に対する一般の見方や評価について考えたい。

- ㉑ 方言は、かつては「非常に変わっている、珍しい、奇妙、意味がよくわからない、面白い、…」などと、好奇の目、色眼鏡で見られることが多かったと思われる。が、最近では、方言に対する見方・考え方にかかなり変化が生じていると見られる。(⇒㉒を参照)

- ㉒㉓ 「方言」に対するイメージや評価は、個人差が大きい。またひと口に「方言」といっても、どの地域のどういう方言を思い浮かべるかによっても相当な違いがあるだろう。同じ関西方言でも大阪方言は、非常ににぎやかで活発、そしてユーモラスだと思われる傾向が強い

のに対して、京都方言は、しつとりと落ち着いて上品だと評されることが多いのではないか。

数多い方言に対して多様な見方や捉え方があること、もちろんであるが、ここに挙げた、方言に対する(+)と(-)両方の見方は、一般によく聞かれると思われるものである。

- ②④ 近年は、方言のよさが見直され、評価にもかなり変化が現れてきている。

1980年頃から「地方の時代」ということばも聞かれるようになり、都会の喧騒から離れて地方でゆったりとした姿勢で暮らすことに価値を見出す傾向が顕著になった。

それに合わせるように、これまでともすればコンプレックスを伴いやすかった「方言」にも関心が集まり、「方言」をいわば地方の文化の象徴的存在だと考えて、再評価する見方や動きが台頭してきた。(⇒ 本稿末尾の《参考文献》に挙げた拙稿「方言の復権」を参照)

第19期と20期の国語審議会も「方言尊重」の考えを提言している(平成5年,7年)。

- ②⑤ 方言は、近年、その土地らしさを前面に打ち出し、強くアピールするのに活用されることが多い。観光客などを主な対象とした方言番付や方言のれんなどの方言グッズは以前から各地にあったが、最近は各種施設や商品などにその土地ならではの方言を生かした個性的なネーミングが増えてきているし、方言の看板や方言で道案内をするカーナビなど、方言を活用した事例も増えている。(⇒ 拙稿「方言の有効活用」「方言によるネーミング」を参照)

それに対して、共通語は特定の地域性を持たず、万人向きのことばだという点が特徴だから、そういう方面での活用例はあまりないといっているのではないか。(方言グッズと似たような使われ方をしているものとしては、例えば、若者が着ているTシャツやトレーナーなどに、ローマ字や漢字で共通語がレタリングされているのがそれに当たるだろうか)。

- ②⑥ 地方を舞台にしたテレビドラマや映画、演劇などでは、近年は「方言指導」という、ことばの専門職の監修や指導を受けて、その地域で実際に話されている方言を踏まえた、リアリティーのある台詞でストーリーを展開するのが当然のことになっている。

ドラマや映画という、いかにフィクションの世界であろうとも、日本の特定の地域を舞台にした作品であるならば、その土地で話されていることば＝方言を無視した作り方をしたのでは、視聴者や観客から厳しいお叱りの声が制作者のもとに寄せられる時代を迎えている。

以前なら、例えば、地方が舞台なら、何となくそれらしさが感じられればいいと考えて、作る側も(見る側も?)おおまかに受け止めていた時代があった。

いかにも九州の方言らしいと思われる文末詞のバイ・タイや逆接のパッテンは、実は肥筑方言の特徴であって、豊日方言や薩隅方言に属する大分県や宮崎県、鹿児島県では(ごく一部の地区を除き)使われていない。にもかかわらず、以前は、制作する側はそういったことには無配慮、無頓着で、九州が舞台であればどこであっても、九州の方言だと思われている要素が入っていればそれでよしとしていた。しかし、今日ではそれでは通らない。

その背景には、日本各地の方言の特徴や、それに関する情報が広く知られるようになったこと、また方言をその土地の暮らしぶりや歴史・文化を象徴するシンボルと捉えて尊重する機運が高まったことなどが挙げられる。(⇒ 先のNo.31「近年の評価」②④にも関連)

第Ⅲ類 「方言」と「共通語」を他のものに喩えるとしたら

以上が「方言」と「共通語」の特性や役割などについての考察だったが、ここからは、それをどういう存在と捉えるか、「方言」と「共通語」を他の何かに喩えて表現するとしたらどうかという、これまでとは別な視点からのアプローチになる。

- ㉗ 様々な可能性が考えられるだろう。もちろん比喩はあくまでも比喩であるが、うまく喩えれば、その関係をわかりやすく、かつ印象的に言い表すことができる。

先の№10「習得の順序」㉗とも関係するが、方言はまず最初にその人に備わった地金（素地・生地）であり、共通語はその上にあとから加わった塗装（メッキ）のような趣きがある。しかし、しっかりした上手な塗装であれば、剥げにくく、地金を守る働きもする。

- ㉘ 私は「方言」と「共通語」は、着る物に喩えると非常にわかりやすいと考えている。

方言に喩えられる着慣れた普段着は、型やデザインなども少々流行後れで、繕ってあったり、洗濯を繰り返して色あせしているかもしれない。が、長く着続けているから自分の体型にぴったり合うようになっており、着ていて違和感がなく、着心地がよく肩が凝らない。

さらに言えば、肌着のようなものだといえようか。下着は着ていることを意識しないくらいに、いわば自分の体の一部、皮膚のような存在であることが望ましい。改まった場で思わず方言が出てしまったときに感じる気恥ずかしさは、ちょうど下着がチラッと見えてしまったときのそれと一脈相通じるのではないか。

つまり、「方言」のほうは、体（言い換えると、自分の思いや考え）がまず中心にあり、それにぴったり合う服（ことば＝方言）が用意されている、という関係になる。

一方、「共通語」はよそ行きの服に相当し、服（つまり共通語）のほうが中心で、これが前面に出ているといえないか。見栄えのいい服に、少々無理をして体（思い）を合わせているような関係に相当する。

もちろん、そもそも自分の体型やサイズに合わせて服を選んでいるとはいうものの、よそ行き用という性質上、見た目のよさが重視される。

その中でも、非常に改まった場合の式服や礼装などの貸衣装は、その最たるものだろう。

- ㉙ 方言のもつたくましさやバイタリティーは、ちょうど野生の草、雑草に似た印象があり、それに対して、共通語のもつイメージは温室で大切に育てられた栽培種のような趣きがある。
- ㉚ 詩人であり演劇人でもあった寺山修司（青森県出身）は、「方言は年老いた実母であり、共通語は若く美しい継母である」と言ったという。両者の違いを、実にうまく言い表した表現だといえないだろうか。

- ㉛ この「色に喩えると…」という比喩は、ある年の学生の回答からヒントを得て毎年聞いてきた結果に基づく。ある年、「色に喩えると」という観点を立て、「方言は茶色＋緑色、共通語は白色＋青色」という回答があった。理由をたずねたら、「方言は、土の多い(茶色)、自然が多く残った(緑色)地域で話されているというイメージが強く、一方の共通語は、方言のような特定の色合いが感じられず(白色)、広々とした大空のような印象(空色)と、透明感があるって多少冷たい印象がある(水色)から、こういう対比をした」とのこと。

以後、この「色に喩えると…」は、独立の質問項目として、毎年全員に聞くことにした。

その結果、それぞれ特定の色に集中する傾向が見られるのは興味深い。

例年多いのは、次のような回答である。

方言 ＝ 茶色、褐色、黄土色、橙色、オレンジ色、黄色、緑、鶯色、草色、…

共通語 ＝ 白、青（水色・空色・ブルー）、灰色（コンクリート色）、…

中には「方言は虹色。地域によってさまざまに色合いが異なっているから」という、実にうまい回答も返って来る。「共通語は無色透明」という回答も、ときどき見られる。

また、ある年、「共通語は黒」という回答があった。「共通語は白」と答える例が多いのに…

と思って理由をたずねると、新聞や雑誌などの「活字」を思い浮かべたからだという。これは先の対照表の№2②の「共通語は話しことばと書きことばの両方のチャンネルを持つ」という特徴を、別な角度から指摘していると見ることができる。

そのようなことがあるから、単に色を聞くだけでは不十分で、なぜその色か、どういう思いを込めてその色を挙げたのかまで聞かないと、“真意”の把握がむずかしい。

同じ「赤」という回答でも、「方言」についての場合だと強烈な個性が感じられるからという理由になり、「共通語」の場合だと、ちょうど力強い血液のように我われの思いを表現するのに不可欠なものだから、といった回答もある。毎年、理由も併せて聞いている。9)

方言は橙色～黄色という回答は、「何となく温かい印象がある」といったことから、また共通語は灰色という回答は、「共通語がよく使われている都市部の、ビルのコンクリートや舗装道路のアスファルトのような無機質のイメージから連想した」という理由が多い。

いずれにしても、多くの人が「方言」と「共通語」に対して抱いているそのイメージが、色に託され、それがあぶり出しになって浮かび上がってきているのだと思われる。

以上、私が考えるかぎり多様な角度から「方言」と「共通語」を対比しながら考察してきたが、どちらも我われの毎日の暮らしの中で、かけがえのない役割を果たしている。

方言がいくら肩がこらずに自分の思いを過不足なく存分に表現できるからといって、すべての場合をそれで押し通すことはできないし、また、共通語が非常に広い範囲に通じて、失礼のないきちんとした表現が可能だからといって、親しい人とのくつろいだ場面においてまでそれでは却って窮屈で、違和感がある。

やはり、TPOを考え、その場その場に最もふさわしいことばを選んで、自分の思いや考えを的確に表現する。それが最も自然で無理がなく、また似つかわしい。

「方言」と「共通語」はそれぞれ得意とする分野と持ち場に違いがあり、相互に補いあいカバーしあって、我われの言語生活をしっかりと支えている。まさに両者はコミュニケーションにおける車の両輪として、我われの毎日の言語生活を豊かに彩り、確かに支えている。

4. 小・中・高校での活用も

現在、小学校・中学校においては、「学習指導要領」の規定に従って、「国語科」の時間に、必ず「方言」と「共通語」について取り上げて学習することになっている。

平成10年に改定された現行の「学習指導要領」では、小学校では5・6年生で、中学校では2・3年生で、「方言」と「共通語」に関する事項を必ず学習するように示されている。10)

従って、どの出版社の国語教科書においても、「方言」と「共通語」に関することは指定された学年で必ず登場するし、また先に述べたように、「総合的な学習の時間」などにおいても往々取り上げて生徒たちといっしょに考える場合も出てくるだろう。

この稿で取り上げた観点や対照的に示したことがらは、そういった場面でも、児童・生徒たちの発達段階や理解度に応じて、先生がやさしいことばに置き換えたり、適宜補足説明を加えたりしながら利用し活用することができるだろうと思われる。

例えば、「方言（共通語）はだれが、どこで、どういうときに使うかな？ 方言と共通語はどっちを先に覚えたかな？ どうやって覚えただろう？ 方言（共通語）を話すときにはどんな

ことを話題にしているかな？ 親しい人とくつろいだ場面で話すときには方言だが、では親しい人に手紙を書くときにはどうだろう？」といった発問をしていき、「方言」と「共通語」の違いに気づかせながら、それぞれの特徴や役割を押さえていくと、両者それぞれに特色があり、自分たちにとって、ともに大切な表現手段であり、また相手を理解するうえで不可欠のコミュニケーション手段であることを認識することができるはずである。

従って、これまで挙げてきた「観点」は、小学校・中学校・高校現場の(国語科)教師の皆さんにも十分参考にし活用していただけるのではないかと考える。

中学校での授業を想定して、先の＜表 1＞の簡略版を作るなら、例えば、次の＜表 2＞のようなものが考えられるだろうか。観点を思い切って絞り込み、半減して作成したものである。

＜表 2＞ 「方 言」と「共通語」の 比較対照表（中学校 2・3 年用 簡略版）

類	項目	No. 観 点	方 言	共 通 語	
第 I 類	数	1 その数	多 数	1 つ	
	種別	2 チャンネル	話しことば のみ	話しことば + 書きことば	
	歴史	3 その歴史	古くから、自然に醸成	明治以降、人為的に形成	
	範囲	4 通用する範囲	狭 い（地域限定）	非常に広い（全国に 世界に）	
	使 用	5 主な使用地域	地方（農山漁村）～都市部	都市部～地方（農山漁村）	
		6 主な使用者	高齢者～中年～青少年～幼児	青少年～中年～高齢者	
		7 主な対象者	地元の親しい人に対して	見知らぬ人などに対して	
		8 主な使用場面	日常の 私的な場面で	改まった 公的な場面で	
	習 得	9 主な話題	身の 身近な事柄を	広範で 多様な事柄を	
		10 習得の順序	もの心ついてまず最初に習得	方言よりも後から習得	
		11 習得の場	毎日の暮らしの中で	学校教育やマスコミなどで	
	理 解	12 習得の方法	自然に 無意識のうちに	努力して 学習によって	
		役割	17 使用目的	私用（プライベート）	公用（パブリック・フォーマル）
		性質	21 その個性	ローカル色・多彩・多様	中立的・都会的・没個性的
		位相	22 世 代 差	どの方言も世代差は大きい	世代差はさほど大きくない
表現		24 表現の程度	思いを存分に表現できる	思いをおおむね表現できる	
理解		26 理解の程度 （同一方言／他方言）	同一方言は細部まで理解可能 ／他方言だと十分な理解は困難	思いをおおむね理解できる	
II 評価	29 一般の見方（－）	古めかしく 田舎くさい ダサい	素っ気なく 冷たい 味がない		
	30 一般の見方（＋）	素朴で 温かく 味がある	あか抜けて スマート 軽快		
III 比 較	35 服装だと	着慣れた普段着（肌着）	よそ行きの服（貸衣装）		

また、小学校高学年の場合には、語彙や理解力などにも制限があるから、さらに観点を絞り込み、よりいっそう平易なことばで表現する工夫が求められる。

＜表 2＞の項目数をさらに厳選し、小学校 5～6 年用を想定して対照表を作るなら、例えば次のようなものが、考えられるだろうか。

<表3> 「方言」と「共通語」の比較対照表（小学校5・6年用 簡略版）

類	項目	No. 観 点	方 言	共 通 語
第 I 類	数	1 その数	その地域ごとにたくさんある	全国で1つだけ
	種別	2 チャンネル	話しことばしかない	話しことばと書きことばがある
	歴史	3 その歴史	古くからあり、自然にできた	明治時代以降にできてきた
	範囲	4 通じる範囲	狭い（通じる地域が限られる）	非常に広い（全国で通じる）
	使用	5 主な使用地域	地方（農山漁村）～都市部	都市部～地方（農山漁村）
		6 主な使用者	高齢者～中年～青少年～幼児	青少年～中年～高齢者
	習得	12 習得の方法	暮らしの中で自然に覚える	努力し学習によって身につける
	役割	17 使用目的	身近な 私的な場面で使われる	改まった公的な場面で使われる
II	評価	29 一般の見方(－)	古めかしい 田舎くさい ダサい	素っ気ない 冷たい 味がない
		30 一般の見方(+)	素朴で 温かく 味がある	あか抜けて スマート 軽快
III	比喩	35 服装だと	着慣れたふだん着（肌着）	よそ行きの服（貸衣装）

お わ り に

以上、「方言」と「共通語」という非常に基本的な事項を、改めて俎上に載せて検討してきた。

各大学や短大などで「方言学」あるいはそれに類する講義を展開する場合には、おそらくどなたも、このようなことを踏まえながら授業を進めておられるにちがいない。

従って、いまさらこと改めて云々するような目新しいことではないかもしれない。

しかし、最近たまたま、専門の辞典類や関係の文献にこういう基本的事項についての詳しい記述が少ないことを知って非常に意外に思い、大変遺憾なことではないかと痛感した。

私自身のこれまでの授業実践をふり返り、その過程で学生たちとともに学び考えてきたことがらをまとめ、大学で「方言学」を講義する際のノート（大切な覚え書き、必須事項のメモ）の再確認をしつつ、かつ私の授業実践の一端を報告するという意味合いを込めて、今回、こうしてまとめてみることにした次第である。

なお、この稿をまとめる段階で、金沢大学の加藤和夫教授に比較対照表の案を見てもらい、忌憚のない意見を求めたところ、いくつかの項目を増やす上で参考になるアドバイスをいただいた。記して感謝する。

「方言学」の授業を受講する学生たちには、「方言」と「共通語」それぞれについて、両者の違いの詳細や、その機能・役割が相互補完的であり、双方ともに私たちの暮らしになくてはならない大切な表現手段であることをしっかり認識し、自覚してほしい。

また、ともすれば色眼鏡で見られがちな「方言」に対しても、つとめて先入観から離れ、より広い視野に立って、公平かつ柔軟な見方で接してほしいと願っている。

さらに教員養成系学部の学生の場合には、ひいてはそれが、彼らが将来教えるであろう児童・生徒たちの言語観の形成にも大きな影響を及ぼすだけに、そのもつ意味は非常に大きい。

そのためには、何と言っても教壇に立つ教授者自身がまず正確に実態を捉えておくことが、

必要不可欠である。もしこの拙稿がその一助となるならば、大変幸いである。

大方の率直なご意見やご感想をお聞かせいただけるならば、大変ありがたい。

また、分類の仕方や表現の是非などの問題点や、私の考えの不十分な点、思いの及ばない点などがあれば、どうぞ忌憚のないご指摘をお願いしたい。さらに追加すべき観点や事項などがあつたら、ぜひ具体的なお教示やアドバイスをお願いしたい。

注

- 1) ここでいう「方言」とは、日本各地の地域社会で暮らしのことばとして用いられている、いわゆるオーソドックスな意味での、地域的な「方言」のことをさして用いる。一方の「共通語」も、「方言」に対する概念で、日本全国で広く通用する、いわゆる「全国共通語」の意で用いる。
- 2) 平成 11 年度からは、教育福祉科学部・人間福祉科学課程で、「社会福祉援助技術現場実習」に参加する前の 3 年生を対象にした「福祉と方言」という講義もスタートした。
この講義で日高は、「福祉・医療と方言」をテーマにして、福祉や医療の現場で、特に相手が高齢者の場合、クライアント（利用者）や患者の皆さんの口から聞かれるその土地の代表的な方言は、ひととおり理解できるようになっておこうという心構えが大切であることなどを中心に、授業を展開している。
この場合も、「方言」と「共通語」の違いを考えることからスタートする。
- 3) 授業では、紙を配り、次のような例を示した上で、「日頃の自分の経験をふりかえって「方言」と「共通語」を対比し、思いつく限りできるだけたくさんの観点から比較してください」という課題を出し、その結果を集めて紹介しながら、このテーマをともに考えている。

	観 点	方 言	共通語
(例)	通用範囲	狭 い	広 い

中には、思いもかけないような観点からの対比や、ユニークな表現や指摘などがあつて、若い学生たちの感性に学ぶことがある。

- 4) 同様に、金田一春彦『日本語音韻の研究』の巻頭の論文「音韻・音声」によると、それまでの音声学関係の文献では、「音声」という最も基本的な事項についての規定が不十分だとして、まずその定義を明確にすることから考察を始めている。学生時代に初めてこれを読んだとき、非常に意外な思いがしたことを思い出す。
- 5) 『国語学辞典』類の場合、「方言」と「共通語」のそれぞれの執筆者が違う場合があることも一因か。さらに、両語は「ほ…」と「き…」という離れた位置にあるし、それぞれ独立して解説を書かなければならないから、両者の対照表を挙げにくいという事情もあると思われる。しかし、例えば「方言」の項目で対照表を示しておき、もう一方の「共通語」の項では「⇒ 方言の項を参照」としておくことも可能ではないか。
- 6) こういった点で、「方言」と「共通語」の特徴をわかりやすく、かつ対照表にして示してあるものとして、『柴田 武 にほんごエッセイ』2 地域のことば（大修館書店、昭和 62 年）所収の、「日本語の方言・共通語・標準語」（初出は、『現代人のための日本語の常識大百科』講談社、昭和 57 年）の表がある。これには「地方共通語」という欄も設けられ、比較のポイントとして、「日本語地域における適用範囲／使われる場面／文字・文章に書かれること／獲得する時期／評価」の 5 つを挙げ、三者の異同が対比してある。一般の読者向けに書かれたもので記述も平明だが、専門書にもこういうわかりやすい記述と見やすい対照表があることが望ましい。（なお、氏はこの稿の冒頭に挙げた 1)『国語学大辞典』の「共通語」の項でも、これに近い記述をしている）。

- 7) 例えば、大分方言の代表的な語＝「ヨダキイ」（古語よだけし の転。億劫だ の意）は、地元の人たちの意識では、単純に共通語にある類義表現の「億劫だ」や「気が進まない、やる気が起きない」などで置き換えることは到底無理であり、“ことに臨んで、しなければいけないという意識はあるものの、できれば何とかそれを回避したいと思うときの、あの何ともいわず言いがたい気分”は、やはりヨダキイでなくてはとても表現できないという。

同様に「ムゲネエ」（かわいそうだ の意）も、この語を使うと、相手の置かれた状況に対して心から同情しかわいそうだ、気の毒だと思っている気持ちが強く表現できるが、共通語の「かわいそうだ」ではただ単に表面的に同情しているような気持ちしか表せないという。

おそらく、同様の感想は、特に感覚・感情表現に関してその傾向が強いものと思われるが、多くの方言の話し手が感じているのではないか。共通語に同様な意味を表す語があったとしても、それよりはやはり使い慣れた方言の語彙のほうがはるかに自分の気持ちがこもった表現が可能で、自分の思いを十分託せたという信頼感と安心感が得られると思われている。

第三者から見ると、「ヨダキイ」も「億劫だ」も、「ムゲネエ」も「かわいそうだ」も同じような意味ではないかと言いたくなるかもしれないが、ご本人にしてみると、やはりそこは使い慣れた方言のほうが断然説得力と迫力がある、ということであろう。

そういった差が生じるのも、地域で暮らす方言の話し手が、方言と共通語を習得する過程とその環境の違いが大きく影響している。（⇒ 先のNo.10～13（⑦～⑩）と深く関連する）

- 8) そのうち、関西方言はテレビ・ラジオなどを通じて見聞きする機会も多く、多くの人たちにとっておなじみの度合いも大きいから、全国諸方言の中でもちよっと特別な存在といえるが、沖縄の方言などは聞いてもまったくといっていいほど理解できないのではないか。
- 9) 学生には「もし「方言」と「共通語」を色に喩えたとしたら何色だと思いますか。まず思い浮かんだその色を挙げ、次に、自分がなぜその色を挙げたのか、そう思った理由を考えて記入してください」と質問して回答を求めている。
- 10) 小学校5・6年では〔言語事項〕の「言葉遣いに関する事項」で次のように示されている。
- （イ）共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。
- また、中学校2・3年では、〔言語事項〕の中で、次のように示されている。
- （キ）共通語と方言の果たす役割などについて理解するとともに、敬語についての理解を深め生活の中で適切に使えるようにすること。

《 参考文献 》

日高貢一郎「方言の復権」（『日本語学』特集・地域方言と社会方言、

平成11年11月臨時増刊号、明治書院）

日高貢一郎「方言の有効活用」（小林 隆ほか編『方言の現在』所収、平成8年3月、明治書院）

日高貢一郎「方言によるネーミング」（『日本語学』特集・ネーミングの諸相、平成17年10月号）

A Comparative Table of Japanese Dialects and the Standard Japanese (Tentative Proposal)

— An Analytic Consideration in terms of
Educational Activities in the University —

HIDAKA Kōichirō

Abstract

There are various differences and features of Japanese dialects and the standard Japanese, both of which play an extremely important role in our language life.

The author, who has taught dialectology in Oita University over the years, considers the dialects and the standard language comparatively, based on the teaching experience in the university, and proposes a comparative table in which 38 items are analyzed, including their features, functions and roles.

This comparative table will be useful as source material because the material contains some important points to which teachers should make reference, when they take up some dialects in Japanese classes from elementary school to high school, in addition to universities and junior colleges.

【Key words】 Japanese Dialects and the Standard Japanese,
An Analysis of Some Properties, A Comparative Table